

第3章

激動の幕末

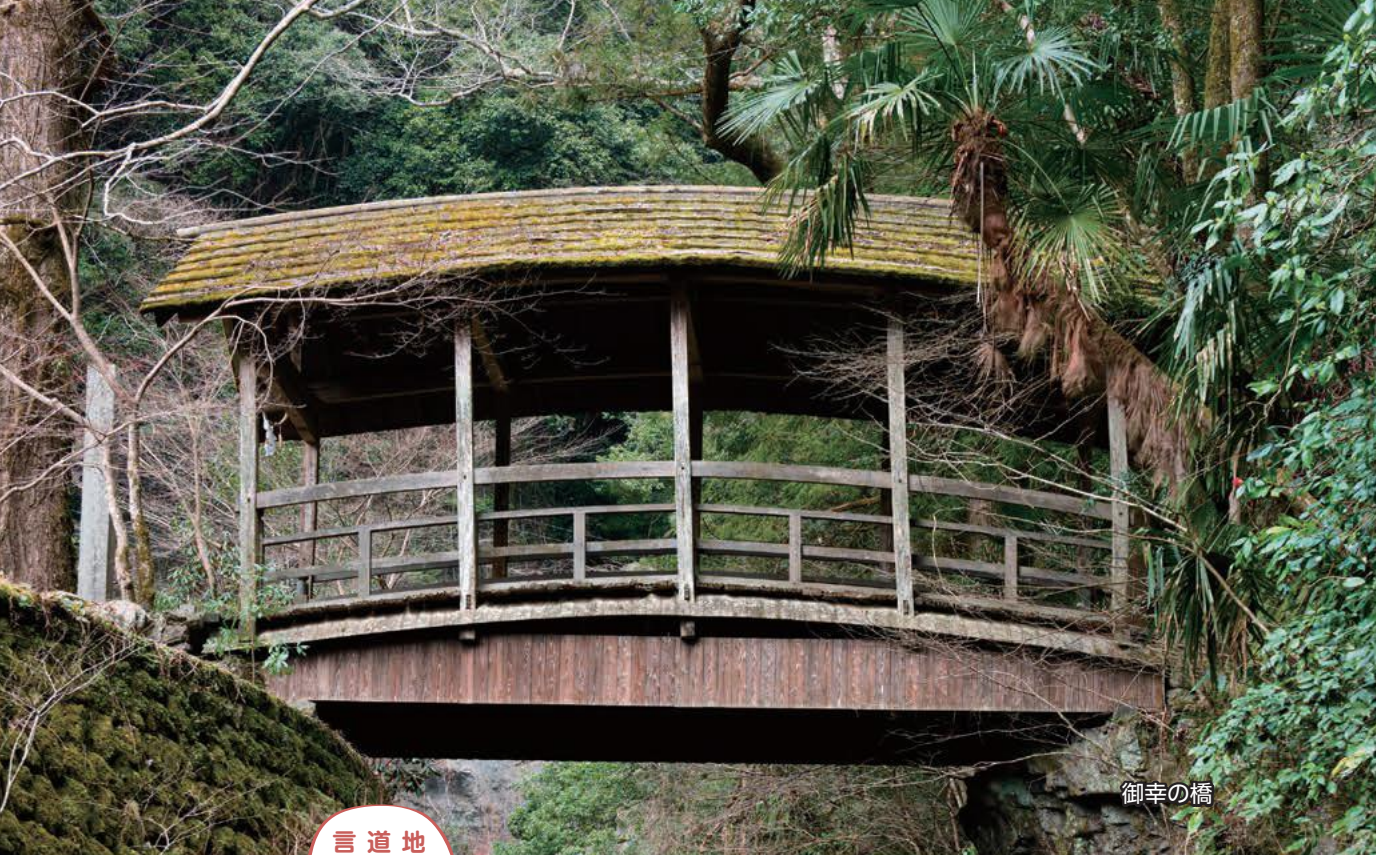
龍馬の脱藩と大洲での学問

坂本龍馬の
脱藩に大洲も
関係あったんだね。

時代は、幕末に入ります。
黒船でペリーが日本に来て以降、日本の情勢は大きく混乱します。この時代「今一度日本を洗濯いたし申候」という言葉を残し、活躍した日本人がいます。坂本龍馬です。

龍馬は、1862年、同志とともにふるさと土佐を後にして、伊予を経由して脱藩しました。この脱藩の道については、様々な説がありますが、その一つである、河辺町の山中や肱川を下り脱藩したルートを紹介します。

飛翔の像 (大洲市河辺町)



御幸の橋

地図の黄色い
道を通ったと
言われているよ。



脱藩の道

険しい山道を
通った後は
肱川を舟で
下ったんだって。



1 脱藩の道 坂本龍馬（1836～1867）というろは丸

龍馬が脱藩をしたのは、1862年3月24日。同志である澤村惣之丞とともに高知の城下町より一路伊予へ歩み始めました。脱藩とは、藩主の許可なく国を抜けるという行為で、重大な犯罪です。土佐の高知から伊予の長浜に至る経路には、高く険しい四国山地があるだけでなく、厳しい監視の目があったはず。そこを、かいくぐりながら通り抜けるには、その道を熟知した人物に頼る必要がありました。龍馬たちが頼ったのは、樽原村の**那須俊平**とその子である**信吾**でした。この二人の協力を得て、樽原を出発した一行は、国境の**葦ヶ峠**を目指します。葦ヶ峠を抜けると現在の野村町に入り、その後、**大洲市河辺町の山中を抜け、五十崎、大洲城下、長浜という経路をとったという説もあります**。それでは、わが町大洲に関連しているところを紹介します。

河辺町には、標高1000mを超える**榎ヶ峠**があります。この峠には、龍馬が通ったとされている旧道が整備されています。また、秋知川（河辺川）に「**御幸の橋**」が架かっています。趣のある屋根付きの橋です。龍馬たちもこの橋を通ったのかもしれませんが。河辺町北部の山中を抜けた龍馬たちは、五十崎に入ります。26日夜は、その**泉ヶ峠**で夜を迎えました。泉ヶ峠では、現在、石のほこらや石垣、井戸の跡などを見つけることができます。

現在、このルートでは、年に一度、脱藩の道を歩くイベントが開かれ、龍馬をしのぶ人たちが大



飛翔の像

那須俊平

（1807～1864）

樽原（高知県）の郷土であり、坂本代五の長男で那須忠篤の養子になりました。「土佐一の槍の達人」と称され、息子である信吾の出奔後、続いて脱藩しました。禁門の変では、得意の槍を振るって奮戦するも、最後は銃弾に倒れました。

那須信吾

（1829～1863）

俊平の娘婿として那須家に養子として迎えられました。信吾は佐川村の藩士の二男として生まれましたが、約六尺（約182cm）という長身で力が強く、足も速かったため「天狗さま」という異名がついていました。龍馬の脱藩を助けた直後、土佐藩の吉田東洋を切って自身も脱藩しました。その翌年、吉村虎太郎の天誅組に参加し、八・一八のクーデターに失敗し、命を落としました。

勢参加しています。また、泉ヶ峠の近くでは、「日本の棚田百選」に選ばれた泉谷の棚田を見ることもできます。

泉ヶ峠で夜を明かした龍馬たちは、27日早朝に出発し、五十崎の**宿間**に至ります。宿間は、かつて小田川から肱川を通って、大洲や長浜へ至る舟運の中継地として栄えた場所です。龍馬と惣之丞は、ここで俊平と別れます。ここからは、舟による旅となり、俊平による道案内の必要がなくなったからです。龍馬たちを乗せた川舟は、肱川をゆっくりと下っていきます。当時の肱川には、堰などはなく木材などを運ぶために舟が通っていました。龍馬たちは、肱川を下り、大洲城下を通り抜けたのかもしれませんが。

一行は、その日の夕方、長浜町に到着します。龍馬たちが上陸した場所は、長浜町の**江湖**と呼ばれる舟だまりだと思われます。現在、江湖は長浜中学校のグラウンド拡張工事のため埋め立てられ、その一部が残っている程度です。龍馬たちは、ここで舟を降り、支援者である富屋金兵衛を訪ねます。金兵衛は代々紺屋を営む豪商で、商売のかたわら、勤王派の志士たちを援助していた人物です。龍馬たちは、四国最後の夜をこの金兵衛屋敷で過ごしました。そして翌日、山口に向かって長浜を出発します。

その後の龍馬の活躍は、皆さんご存知のとおりです。「今一度日本を洗濯いたし申候」と書き残した龍馬は、薩長同盟の立役者となり近代国家建設のための布石を打っていきます。しかし、脱藩して5年後、1867年、龍馬は京都の近江屋で刺客に襲われこの世を去ります。

幕末に活躍し、日本を動かした龍馬ですが、脱藩やいろは丸など、私たちの大洲にもその大きな足跡が残っているのです。



江湖

いろは丸事件

1866年6月、鉄砲の購入のため、大洲藩主加藤泰秋は、国島六左衛門を長崎に派遣しました。六左衛門は、長崎で龍馬に会い、その勧めで鉄砲の代わりに蒸気船（いろは丸）を買ってしまいました。六左衛門のこの行為は藩主の黙認により一旦おとがめなしとなりましたが、六左衛門は、この蒸気船をうまく活用することができず、その責を問われ、自刃に追い込まれたとも言われています。その後、いろは丸は龍馬たちが経営する亀山社中に貸し出されますが、1867年の初航海で、紀州和歌山藩船・明光丸と衝突し沈没してしまいました。その後は、紀州藩を相手に、龍馬が中心となり賠償の交渉が始まりました。交渉には土佐藩の後藤象二郎が加わり、土佐藩と紀州藩の事件に発展します。最終的には土佐藩参政・後藤象二郎と、紀州藩勘定奉行・茂田次郎の会談に持ち込まれ、ついに紀州藩が賠償金の支払いに応じるようになりました。

② 新しい学問

(1) 国学の研究に力を尽くした矢野玄道 (1823~1887)

矢野玄道は1823年11月17日、矢野道正の長男として喜多郡阿蔵村有松（現在の大洲市阿蔵）に生まれました。3歳のときに、母に抱かれて千字文を覚え、6歳にして父から論語を学んだと伝えられています。

15歳のときには、父から、「国学の中の一つである古学を研究し、その業績を後の世に残すように心掛けなさい。」と諭されました。そのことから玄道は、**生涯を国学に打ち込む**ことにしたのです。そして、1845年4月、22歳のときに京都の順正書院という塾の塾生になり、25歳のときには、**平田篤胤**の門下生となりました。

また、幕府の学校である**昌平坂学問所**に入り、**多くのことを学びました**。このころから、



矢野玄道（大洲市立博物館蔵）

天皇を重んじるという勤王の考えが強くなり、一日も早く幕府から天皇の政治に戻すことを念願するようになりました。玄道は、政権が天皇に戻ったときのことを考え、古代の律令はもろろん古い政治の本を集めて研究したり、さらに世界の国々の制度についても学んだり研究したりしました。こうして、世界の政治や制度について精通しておくことが、これから大切になると確信

千字文って？

子どもに漢字を教えるために用いられた漢文の長詩で、千の異なった文字が使われています。

国学ってどんな学問？

江戸中期から後期にかけて、日本の古典を見直そうという動きが出てきました。古事記や日本書紀、万葉集などの日本の古典を通して、日本古来の文化を明らかにしようとする学問であり、これを国学と言います。国学は、日本古来の精神に戻ることを主張するもので、これが復古主義に発展し、尊王攘夷運動に影響を与えました。

平田篤胤

江戸時代後期の国学者・思想家で、本居宣長の影響を受け、日本古来の純粋な信仰を尊ぶ復古神道を開き、儒教や仏教を強く排斥しました。

していたからです。そして、明治維新前には、天皇の政治に戻ることを予想して、そのための用意をしておこうと考えていたようです。

玄道は、このように世の流れを読み、先を見据えた計画や実践を行い、幕府を恐れない大胆な人柄だったようです。

そして、1867年10月、ついに政権が幕府から天皇に返還されました（大政奉還）。

朝廷は王政復古の大号令を発表して、天皇が政治を行い、話合いで物事が決定する仕組みや、能力のある者は、身分の貴賤にかかわらず政治に意見を述べるができるような体制を作りました。玄道も「**献芹詹語**」けんきんせんごという**36か条からなる意見を岩倉具視に進言**いわくらともみするなどして、改革後の政治に大きな影響を与え、功績を残しました。玄道は、日本の大きな転換点である**明治時代を、強力に支えた人物の一人**だったのです。

50歳の頃からは、書籍の著述に力を注ぎ、700巻以上の本を世に送り出しました。玄道は、その生涯を、名誉や利益を欲しがらず、寸暇を惜しんで学問に励みました。自宅には、客が世間話のために長居することを嫌い、居間の入り口に「御用調中、特に病人故、長話いやいや。」「しらべ中ながばなしいや。」と書いた貼紙をしたと伝えられることから、学問に人生を捧げたことが分かります。

玄道は、1887（明治20）年、3月下旬、病にかかり、5月19日に65歳で亡くなりました。宮内省からは、玄道の死を悼み、**祭祀料**さいしりょうとして金百円が贈られました。当時の百円は現在の百万円ほどの額と言われています。玄道の存在は、国にとってそれほど大きいものだったようです。久米小学校では、玄道の命日である毎年5月19日に「**玄道祭**」げんどうさいを行い、玄道の遺徳をしのんでいます。



久米小学校で行われている玄道祭



矢野玄道像

玄道祭
（久米小学校）

(2) 日本初の電信実験を成功させた三瀬諸淵 (1839~1877)

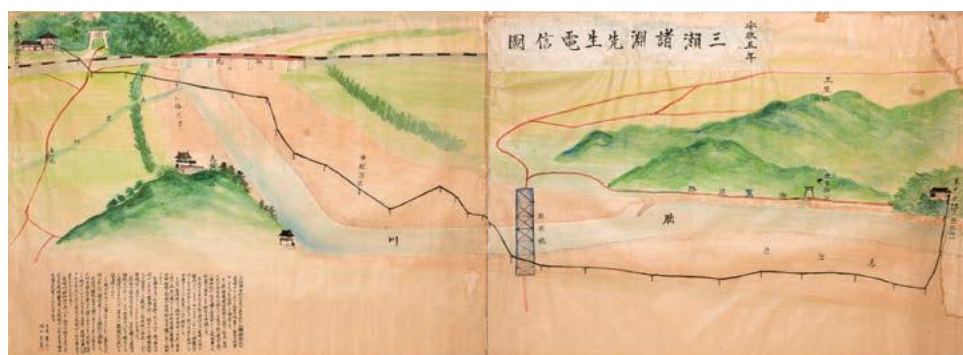
三瀬諸淵は、1858年に長崎から帰郷したとき、持ち帰った機材などを使って、電信実験を成功させました。その実験は、常磐井家の塾である古学堂の屋根を出発点に、肱川をさかのぼり、渡場にある住吉神社付近までの約1kmに銅線を張って行われました。その功績をたたえて、1981（昭和56）年に日本電信電話公社（現在のNTT）によって、八幡神社の鳥居前に記念碑が建てられました。

諸淵は、1839年10月1日、大洲町中町一丁目の塩問屋麓屋半兵衛の子として生まれました。14歳の頃、八幡宮の神官であった常磐井厳戈の門下生となり、国学の勉強に励みました。厳戈は天皇を重んじる尊皇論を説いていましたが、外国人を追



三瀬諸淵（大洲市立博物館蔵）

い出し、国を閉ざす考え方にこだわることはしませんでした。ですから、厳戈は洋学の研究を行い、



電信実験図（大洲市立博物館蔵）

諸淵を育んだ三瀬家

三瀬家は富商で代々学問を好み、祖父の有儀や父の半兵衛も国学や和歌を学びました。母の倉子は、二宮敬作の姉であり、諸淵はこのような家族に囲まれて育ちました。1843年諸淵5歳のとき、母から百人一首を詠み聞かされ、ことごとく暗唱したことからも、彼の才能のすばらしさがうかがわれます。

古学堂

八幡神社の神職である常磐井家の学塾の名前を古学堂と言いました。幕末、厳戈は古学堂で藩の執政山本尚徳や箱館五稜郭（北海道）の設計をした武田成章たち、多くの人材の育成に当たりました。



開国に関しても先見の明をもっていました。そのため、諸淵に与えた影響は極めて大きかったようです。諸淵の残した「備忘録」という書物の中に、「この師を得て志を立つ。」という記録がありますが、この内容からも、洋学を学ぶことを志したのは、厳戈の教育が基礎になったものと考えられます。

1855年の正月から、諸淵は、当時の卯之町（現西予市宇和町）で医院を開業していた母方のおじである二宮敬作のもとで蘭学と医学を学び始めました。その後、敬作は宇和島藩の准藩医となって宇和島に移住したので、諸淵も彼について行きました。宇和島では村田蔵六（大村益次郎）の門下生になって蘭学と武術を学びました。

このとき、シーボルトの娘イネも蔵六のもとで学んでおり、その頃から、イネの娘の高子と諸淵が結婚することが約束されていたようです。

また、諸淵は宇和島に移住した同じ年に敬作とともに長崎に行き、そこで敬作の助手を務めました。1859年にも再び長崎に赴き、2年間にわたりシーボルトの教えを受けました。諸淵は、シーボルトやおじ敬作の教えを受け、医師としての技術も身に付けていきました。その後、シーボルトの孫娘の高子と結婚し、宇和島藩の通訳として活躍しました。1869（明治2）年、政府の命を受け、大阪の医学校兼病院に出向した諸淵は、大阪で通訳と秘書を兼任していましたが、1876（明治9）年に大阪病院一等医に任じられました。この頃の諸淵は、欧米を視察して有能な医者を引き、東京に大病院を作りたいという願いをもっていました。しかし、病のために1877（明治10）年、39歳という若さで亡くなりました。1928（昭和3）年、郷里大洲の有志が諸淵の功績をたたえ、墓所を大洲市大禅寺に移して碑を建て、永くその遺徳をしのぶことにしました。



電信記念碑（八幡神社）

諸淵が投獄される

1861年、諸淵は外交の機密をもらしたと誤解されて投獄されました。4年間にわたって獄舎生活を送りましたが、その間にオランダ眼科医書やオランダ外科医書などの翻訳を行いました。また、囚人の病気の治療や介抱を行ったりしたので、釈放の際には、幕府は紋付きの服を与えて諸淵を賞賛したと言います。

誤解による
投獄だけれど
罪が許されて
良かったわ。



第1章 近世の始まり（安土桃山時代）
第2章 大洲藩 加藤家の治世
第3章 激動の幕末
第4章 明治の発展
第5章 大正・昭和の展開
第6章 大洲市ゆかりの人々

(3) 五稜郭を設計した武田成章（斐三郎）（1827～1880）

北海道函館市に五稜郭があることは有名です。五稜郭には、その全景を見下ろすために展望塔がありますが、そこには、**五稜郭の設計者である武田成章の像**があり、その下の解説文には、伊予大洲藩の出身であることが記されています。

ここでは、この成章について紹介します。

成章は、大洲市中村に生まれ、幼少期は、藩校明倫堂で儒学や兵法を学びました。22歳のとき、成章は医者になるため、当時日本最高の蘭方医と言われた緒方洪庵の適塾に入門することを藩



武田成章（斐三郎）顕彰碑（五稜郭内）（函館市教育委員会提供）

に願い出ました。藩主加藤泰幹は蘭学に理解があり、成章に旅費と学費を与えました。大坂へ旅立ち、適塾に入門した成章は、蘭学の勉学に励みました。その後、兵学者として有名な佐久間象山が、江戸で砲術の塾を開くと聞くと、好機を逃してはならないと考え、勝海舟や吉田松陰、坂本龍馬とともに入門し、海防策や洋式船の研究、砲台の建築等に打ち込みました。

ひたすら洋式兵学に励んだ成章に、いよいよこれを実際に役立てる機会が巡ってきました。1853年、アメリカ東インド艦隊司令官ペリーが浦賀に来航したのです。海防の強化を図らなければならなくなった幕府は、成章を旗本格として召し抱えました。

武田成章の逸話

- 11歳の頃小舟を自作して肱川に浮かべ大人を感じさせました。
- 函館奉行所にいたとき、日本初のストーブを考案しました。
- 函館で成章と会見たペリーが、その人物と学識の深さを褒めたたえました。
- 勝海舟は、成章が死去した際に「我が国科学技術の先駆者として万能の逸材であった」とその死を惜しみました。
- 明治8年当時、陸軍将校12人のうち薩摩や長州、土佐以外の出身者は成章だけでした。
- ペリー来航のとき、吉田松陰らとともに浦賀に行つて黒船を見て「三浦見聞記」を著しています。
- 国産帆船で日本一周をしたり、ロシアの黒竜江に日本初の修学旅行を兼ねた貿易に出かけたりしています。



五稜郭（函館市教育委員会提供）

また、成章は、通商を求めてきたロシアの海軍提督プチャーチンとの折衝に参加し通訳も務めています。

その後、幕府は北海道の守りに備えて函館に砲台と要塞を築くことになり、その設計を成章に命じました。オランダ築城書で研究をしていた成章は、一年半をかけて五稜郭を設計し、起工してから七年を経て完成しました。五稜郭は、我が国における城郭建築の最後を飾った、最も優れた近代的な城でした。1868（明治元）年に五稜郭にたてこもり、官軍と戦った榎本武揚は、「この城は、壮大、堅固、優美である」と賞賛しています。

数々の業績をあげた成章は、明治維新後も新政府の兵学校教授や陸軍大佐等の要職を命じられま

した。1876（明治9）年には、陸軍中佐村田経芳が考案した村田銃の試験委員となり、この銃は、後に日清・日露戦争で威力を発揮しています。

1880（明治13）年、成章は病気のため54歳で亡くなりました。成章の功績をたたえる碑は東京芝公園のほとりに建てられています。

武田竹塘先生紀功碑

（東京都港区芝公園内）

1881（明治14）年に、武田成章の功績をたたえて、東京の芝公園内に門弟によって建てられました。この碑には成章の生前の功績が多数記されています。竹塘は成章の号です。



北海道でも偉大な功績を残していたんだね。

